

GREEN EARTH 緑の地球

地球環境のための国境をこえた民衆の協力

COM21 通巻295号 発行/COM企画室

1992・2

1

- 発足にあたって P 2
- 中国渾源県現地ルポ P 4 ~ 5

編集/緑の地球ネットワーク(準)
Green Earth Network
大阪市港区市岡元町3丁目9-16 西建ビル
TEL.06-583-1719 FAX.06-583-1739(番552)
郵便振替 大阪 4-128465



最上部まで耕された黄土台地と一本
もない山。ここを緑に変える試みはす
でに始まっていた。



零下17度の渾源の町。売られている
肉も魚もいつのまにか冷凍食品に。

緑の地球を！

緑の地球ネットワーク（準）

代表世話人 佐野 茂樹

今は恐るべき地球環境危機の時代である。人類を含む無数の生き物が共生する地球生命圏が衰滅に向かっている。

地球環境危機は近未来に突然爆発するのではない、現に今進行している事態である。昨日のチェルノブイリが今日の日本となり、今日のアフリカ飢餓が明日アジアを襲わないと誰がいえようか。

これまでの趨勢では大破局は不可避である。破局に向かって突進しているのは人類であり、その生産・消費・廃棄からなる社会の営みそのものである。

地球生命圏もろとも破滅に向かう人類のあり方を、地球再生に向けて根底から反転させなければならない。生存に必要不可欠な環境の全分野に於いて全課題ともれなく対決し、環境破壊力に対して環境再生力を生み出し、対置し、強め、拮抗し、凌駕することなしには、いかなる未来展望もありえない。環境再生の営みと人々の絶大な協働関係の中にこそ、存続可能な新たな共生的社会が芽生えるであろう。

私たち緑の地球ネットワーク（準）は、環境再生のキイポイントである森林再生・水土保全に全力あげて奮闘するものである。森林消失・水土流失

は、放射能、大気汚染、熱異変とともに、地球上の命を脅かし続けているからである。木々の緑に包まれた母なる大地を育むことは、人類が環境に調和して存続するための欠かせない前提である。

歴史上、多くの文明世界が森林・水土を失うことによって衰滅した。その教訓をかみしめなければならない。

「緑」は生き生きした環境の象徴であり、もっとも基礎的な生命の証である。

私たちは「緑の地球」を、なによりもまず第三世界の農山漁村牧地で追求するであろう。そこでは「緑」の欠如がいっそう深刻であるばかりではない、それが大量生産と浪費に明け暮れる過度に肥大した今日の高度工業社会が全地球上を支配してきた犯罪の結果だからである。

地球環境修復のために、全分野全課題で均衡のとれた世界的規模の協調と協働を実現しなければならない。高度工業社会の環境破壊的あり方からの脱却とともに、第三世界の諸地域に於いて生態系の活性化と結びついた民衆の生の充実に向けて、国境を超えた無私の協調・協働を生み出すこそ最も緊要なことである。ここにこそ、自己破滅的な人類史を反省し、共生社会の

アクションとして、92年春から中国山西省・渾源県との緑化協力を開始し、その後、他の地域やアジア諸国に協力関係を拡大する計画です。

共同の緑化事業の実施、ワーキング・ツアーの派遣、資金・技術面での協力など多彩な活動を追求しますが、それと同時に日本国内でも、環境問題への関心の喚起、研究・学習活動、野外研修など、どなたでも参加できる幅広い活動を展開したいと思います。

日常活動の費用は、会費ならびに会が随時におこなう事業収入によってまかないます。



中国山西省青年連合会と共同の緑化にむけて合意書をむすぶ佐野さん（左）建設をめざす新しい潮流がある。

「豊かな社会」、これと分かちがたく結びついている絶望的な飢餓と貧窮——この南北問題の構造を打破することと地球環境修復とは一体のものである。

「北」は、政・官・財あげて、諸国ござって「南」の環境修復に協力すべきである。環境再生と生の拡充とを求めて奮闘する民衆に導かれるとき、「北」の人材、技術、資金は有効な働きをなしうるだろう。

だが、まずもって必要なことは民衆レヴェルの環境国際協力を、第三世界の至るところに生み出すことである——先人たちがそうしてきたように。

緑の地球ネットワーク（準）は、その一歩であり、一環である。

生存環境を破壊から守り、未来の世代がつくる社会の、健康な自然のために奮闘しよう。

「豊かな社会」の利己を打破し、地球生命圏全体の利益のために奮闘しよう。

国際協力活動にかかる費用は、より広範なみなさんの寄付を中心にまかう計画です。

みなさんの「緑の地球ネットワーク準備会」へのご入会をお待ちしております。

★一般会員 年間1口12,000円

家族会員半額、大学生3000円

高校生以下1000円

★団体会員 一般会員と同額

なるべく3口以上のご協力をお願いします。

★賛助会員 年間1口10万円

★会報購読だけ 年間2000円

緑の地球ネットワーク（準）にご入会ください

緑の地球ネットワークの目的は、深刻化する地球環境の危機を、アジアの民衆の国際協力によって地球再生へと逆転させることです。

当面はアジアの国々における緑化活動への協力を主要な課題とし、民衆の生活にかかわる環境全般の問題へと拡大することを希望しています。最初の

中国民間緑化の試み

深尾葉子（大阪外国语大学教員）

中国で木を植えようとする人々の集まりが、大阪で発足した。かねてから、中国の緑の現状に心を痛めつつ、一人では何も出来ないでいた人々が集まり、そして動き始めた。

スタートは、ささやかな動きかも知れないが、その意義は大きい。この会の特徴は、これまで主として中国を対象に緑化を行い、またその調査を行ってきた、既存の団体や、人々とも連携をとりあって、また教えて頂きながら、少しでも裾野の広い活動を目指そうという点にあると思う。この会の発足にあたった人達の動きのお陰で、これまでつながることの少なかった人と人、情報と情報が繋げられていくのを感じた。まさに、ネットワークとしての意義を發揮しているといえる。

中国における緑被面積は、国土総面積の12%前後。砂漠化や土壤流失、水害発生など、森林減少を直接、間接の

原因とすることがらに悩まされ、その状況は極めて深刻である。日本でも近年、環境問題への関心が高まり、特に東南アジアの熱帯林の現状については、人々の関心も、理解も、行動も随分深まったように思える。もちろん、それで問題が解決したわけではないが、状況の改善に、一定の力を持ち始めたのは確かである。しかし、同じアジアの地域の中国に関しては、十分に関心が持たれていたとは言い難い。

その理由には、幾つかあるが、まず最大の原因は情報が十分に入手されにくい点や、また日本国内でも十分に伝えられていないという点が挙げられる。そのこともあって、日本人は中国の自然というと、「雄大」「悠久」といったイメージで捉えがちである。

また別の理由として、森林消失の理由が、国内的要因であったり、歴史的に極めて幅の広い問題であったりする

ことにより、日本との関係が東南アジアほど、直接的でないという点もある（だからといって、関係がないということではない）。さらに、中国自身から緑化成功のニュースがしばしば報道されるために、中国独自で緑化問題はかなり解決されているのでは、という誤った理解がなされているというケースも多い。

このような理由で、環境問題認識の高まりの中でも、中国の森林破壊については、いまだ十分な理解が得られていないのが現状である。しかし、変化も徐々に見られる。中国の砂漠緑化については、元鳥取大の遠山先生をはじめ、長年の地道な、しかし着実な努力があるが、これまで余り関わりを持たなかつた人たちも、中国の環境問題に少しずつ目を向け始めた。今後、これは大きな流れとなってゆくのではないか、と密かに期待している。

今回の活動の中心メンバーとなる方が、ある中国人留学生の紹介で訪ねて来て下さってから、半年余り。その間、人の輪がどんどん広がって、活動体制も着々と整っている。現在は、次の緑化に適したシーズンである5月～6月を目指して、第1回結成へ向けて、準備が行われている。私自身も、この活動の一端に加えて頂いたことを、非常に嬉しく思い、また自分ができる貢献をしたいと思う。

中国の、とくに「奥地」と言われる地域や、農村部、山間部との「草の根」交流は、なかなか難しい。しかし、この緑化を願う人々の日本での集まりが、主体的で、民間の集まりであることから、中国側も是非、民間の、主体的な人々と連携してゆきたいと思う。

そうすることで、プロジェクト型の植林でない、人々の間で模索し、彼らの生活との関わりの中から答えを見いだしていくような、息の長い交流のあり方を、そして緑化の処方箋を探ってゆきたいと思う。その中で得たものは、中国に生きる人々にとっての処方箋であるばかりでなく、翻って我々の生活の、社会のあり方をも見直す視点が、多く含まれていると確信している。

92年5月、上海→太原→五台山→渾源→大同→北京

「中国緑化協力の旅」にご参加を！

中国山西省渾源県では今年も3月から5月にかけて精力的な緑化活動が取り組まれます。

緑の地球ネットワーク準備会はこの時期に緑化協力団を派遣し、国際協力の第一歩を踏みだす計画です。ぜひご参加ください。

★期日 1992年5月6日～17日
(飛行機を手配中、変更の可能性もあります)

★訪問地 上海→太原→五台山→渾源→大同→北京

★費用 26万円程度
★定員 20名(定員に達しだい締め切ります)

*渾源県の西留郷、恒山などで植樹活動に参加し、地元の農民、林業関係者、青年たちとの多彩

な交流活動をおこないます。また雁北地区の青年がとりくんでいる「桑干河青年緑化プロジェクト」を見学し、来年以降の協力を協議する計画です。

*黄土高原の東端、太行山脈のふもとに目的地があります。山西省は漢文明の発祥の地で、文化遺跡がたくさんあります。黄色い大地と大きな山波、気候、風土、そして生活のありよう、日本の私たちにとってはすべてが新鮮です！ 地元での時間をゆっくりとり、緑化以外の面でも双方向の交流を充実させたいと思います。団員の手作りの旅にするため、積極的な提案をお寄せください。



北岳・恒山からみた恒山山脈。大きな山並みがえんえんとつづく。

▷現地との協力を求めて△

地球環境を回復するためのアジア民衆の国際協力を実現したい——私たち「民間緑化考察団」（佐野茂樹団長、竹田幸子副団長、5名）は、1月12日から5日間、中国山西省雁北地区の渾源県を訪れました。

中国の緑化事業にとって大きな推進力が青年の力。私たちの計画を現地と結びつけるため、中華全国青年連合会国際部と中国共青団中央青農部・山西省委員会青農部の方が同行してくれました。

北京を夜11時半発の夜行列車で発ち、雲岡の石窟で名高い石炭の街・大同に着いたのが翌朝の6時半すぎ。渾源へはここから車でゆっくり走って2

毎年200ヘクタール、5年で1000ヘクタールを松林に。
時間弱。

この一帯は黄土高原と蒙古高原が交

緑化最前線・山西省渾源県を訪ねて

「中国の緑化に協力しよう」と私たちがいようと、中国に何度も行ったことのある人が意外そうな顔をします。中国では首都の北京をはじめ、都市の緑化は日本以上にすすんでおり、道路や鉄道のわきの並木もほんとうにみごとなものだからです。

しかし、地方の農村や山地にはいると風景は一変します。数千年の文明の破壊と巨大な人口、厳しい自然のために、一本もない山が連なり、水土流失と砂漠化が進行しています。中国の森林被覆率は13%弱、日本の67%と比べれば深刻さがわかります。1991年の長江（揚子江）の大洪水では2億人が被災しましたし、黄河が運び出す

わるところで、中国でもっとも早くから文明が発達しました。新旧石器時代の遺跡が多く、春秋戦国時代の青銅器もたくさん出土しています。

歴史の長さは自然破壊の深刻さでもあります。山西省はずっと昔は森林が繁茂し、気候も穏やかで雨量に恵まれていたのですが、車窓から見えるのは一本もないハゲ山と段々畠、

あちこちに浸食による深い裂け目が口を開けています。草ははえていても、

いまは冬枯れで、いかにも荒涼とした茶一色の風景。しかし、道路わきや畠のあいだに幾重にも植えられたポプラの若木があり、最近の緑化運動の盛り上がりを感じさせます。

▷畠を森林へ転換はかる△

渾源県では協同の緑化事業の候補地として3つのプロジェクトを見学しました。

最初に見たのは県西部の丘陵地にある西留郷の植林地。海拔1300メートル、目の届くかぎりに広がる台地を、年に200ヘクタール（1ヘクタール=1町歩=3000坪）ずつ、5年で1000ヘクタール緑化する計画です。年間降水量は500ミリたらず、しかし90%が7

～9月に集中し、まとまって50ミリも降れば洪水になり、浸食のあとがあちこちに見られます。土壌は厚いのですが、肥料分と保水性に乏しいアルカリが強く、条件は見た目ほどよくありません。

およそ2メートル間隔に深さ30センチの溝をほり、その底に1メートル間隔で樟子松の小苗を植えていきます。3～4月に植え、6月までに1回水やりすれば根づき、活着率は95%。初期の成長はおそらく、直径10センチになるまでに15

年かかりますが、その後の成育はかなり早まるそうです。

作業はすべて人力で、この村では誰もが年に10日間は植樹に従事するよう決めています。労賃は日本円に換算して1日120円ですが、支払いは木の成長を待ってのことです、ずっと先です。

ここで特徴的なのは、これまで畠だったところも林に変えようとしていること。92年の予定地には、昨年は油菜が植わっていました。「平地の食糧生産高があがったので、環境に目をむける余裕がでてきた。緑化で環境がよくなれば、収穫もさらに上がる」という説明。そうはいっても、これは農民たちにとっては大きな決断だったでしょう。緑化にかける農民の意気込みが伝わってきます。

緑化の費用は1ヘクタールあたり3万5000円。苗木代金は松の小苗が1本5～7円、育苗に3年かかり高いといわれるアンズでも1本24円。こうやって地域にすれば、私たちの小さな協力でもどれだけ役立つか、具体的に見えできます。

現地を見学したあと、郷のみなさんと懇談しました。山西人は中国では独立不羈で通っていますが、ほんとうに純朴で誇りたかい人たち。知りあってくれば、その親切さが心にしみますが、この日は初対面。重い口を開いて「緑化がすすめば生態効果だけでなく経済効果もあるが、しかし第一の目的は生態効果」「いま木を植えれば、子



26歳の童顔ですが、村の小中合同学校の校長先生。

や孫の代の生活はきっとよくなる」と語ってくれたのが印象的でした。

【次頁につづく】

緑化協力についての合意書

一、日本側・緑の地球ネットワーク準備会は、地球環境の危機、とりわけ人類生存の基本である森林と水土の急速な消失を深く憂慮し、その克服のためのアジア民衆の国際協力を求めてきた。今回、中華全国青年連合会の全面的な協力のもとに、1992年1月12日から17日まで中国山西省の渾源、大同、太原などの諸地域に、佐野茂樹を団長とし、竹田幸子を副団長とする民間緑化考察団を派遣し、山西省青年連合会、渾源県の関係部門からそれらの地域で推進されている緑化活動をさまざまな方面から紹介され、またその実際状況を考察した。三北防護林プロジェクトの一部をなすこの地域の真剣かつ精力的な緑化活動に考察団は深く感動し、可能な協力と共同の緑化事業を1992年から開始したいとの意向を表明した。

二、山西省青年連合会は、そのような国際協力の推進が、中国の進める生態環境の改善に役立ち、また中日国交正常化20周年を出発の年とするにふさわしい子々孫々の中日友好にとって意義ある事業と受けとめ、山西省青年連合会と緑の地球ネットワーク準備会が共同の緑化事業に着手することに同意した。

三、双方は、現地の考察と一連の協議をへて、以下の合意に達した。

1. 日本国は、1992年3月から5月のあいだに渾源県等の地域に再度、緑化考察団を派遣する。中国側はそれを積極的に受け入れ、その機会に植樹活動を開始できるよう手配する。

2. 日本国は1992年度の共同の緑化事業の資金として中国人民幣10万元の提供を約した。具体的な使途、方法ならびに長期駐在者の滞在費用等については、第2次考察団の訪問時に双方で協議し、決定するものとする。

3. 中国側は、日本側の「現地の人々との親密な関係を築き、共同の緑化事業を円滑に推進するため現地に長期の駐在員を派遣したい」との提案を積極的に受けとめ、関係部門と協議のうえでその結論をできるだけすみやかに日本側に連絡する。

4. 日本国は、中国側が紹介した「桑乾河緑化プロジェクト」に深い関心を持ち、今後の協力を検討する意向を示した。双方は、相互の信頼のもとに今後も協力関係が拡大することを熱望する。

5. 日本国は、今回の考察活動の記念として、1月14日、渾源県共青団委員会に対し、あんず苗木1千本の購入代金1千元を贈った。

以上

1992年1月17日

日本側 緑の地球ネットワーク準備会

佐野茂樹（署名）

中国側 山西省青年連合会

郭良孝（署名）

緑化最前線・渾源県を訪ねて

▷ 厳しい環境で木は育つ ◇

つぎの日は零下17度の冷え込みのなか、山地にある第2、第3の候補地に



活着率91%、年に80センチは伸びるカラ松の植林地。

でかけました。渾源県は全面積2000平方キロの71%が山地（最高2300メートル強）で、15%が丘陵、中央の盆地部分（それでも海拔1000メートル強）は14%にすぎません。山地のうち緑化に適するのは6万ヘクタールですが、その半分の3万ヘクタールがまだ手つかず。県では来世紀の初頭までにその緑化を完成する計画です。

第2の候補地、銀屯梁緑化プロジェクトの主体は唐松で、つぎつぎと連なる山の斜面に植えていきます。活着率は91%と高く、1年に80センチは伸び、途中で枝落としをする必要があり



暖かい心のふれあいに満ちた渾源の町。

ません。この計画の出発は87年で、初期のものはすでに3メートルを越えており、この日は雪のため見れませんでしたが、尾根向こうの50年代の植林地では直径30センチ近くに育っているそうです。

降水量の不足と土壌の貧困、さらには厳しい寒さのため、樹種に多様性の欠けるのが気になるところですが、白樺と雲杉の混合林をつくったり、南方に多い台湾赤松（馬尾松）を試したり、県でも現にいろんな工夫がされており、またこの地に適するものなら積極的に

取り入れたいとのことでした。

▷ 北岳・恒山にかける夢 ◇

第3の候補地は中国五岳のひとつで天下第二岳といわれる恒山。渾源の县城から南へ5キロのところにあり、ふもとには北魏時代（6世紀）創建の懸空寺（国家文物単位）があります。山中に40の寺院があり、道教の聖山としても有名で、ここからの眺めは最高。国内はもちろん、国外からも毎年1万人の観光客がきており、大半は日本人です。日中戦争前までは緑に覆われていたのが戦火で焼かれ、山頂や中腹にわずかに残って

いる松は樹齢800年の巨木です。

ここでもかなりの勢いで緑化がはじまっていました。土壌が薄く、条件はあまりよくないので、最近まで木が生えていたのですから可能性は大。

うれしかったのは、「サージ」という灌木に小さな赤い実があり、それを求めて小鳥がきていたこと。中国では都会はもちろん、農村、山地でも小鳥の姿はほとんど見られません。この山を小鳥の鳴き声がする多様性のある森

でおおえたら、周囲の緑化も自然にスピード・アップするにちがいありません。

この恒山で日中共同の緑化を始めれば、シンボルとして大きな意味をもつのではないか、私たちの夢はどこまでもふくらんでいきました。

▷ 92年からさっそく開始 ◇

考察のあと地元の関係者と協議を重ね、いくつかの合意に達しました。①協同の緑化事業を92年から開始する、②3～5月に第2次の考察団を派遣する、③初年度の協同緑化事業の資金として日本側は中国元10万元（日本円250万円）を準備する、④日本側が提案した「長期の駐在員」については（この地域が外国人に未開放であるため）関係部門と協議のうえ回答する、というものです。それを山西省青年連合会と文書にまとめました。

私たちが合意した協力は小さなものです。しかし中国の人たちは、自分たちの事業が国際的に注目されたことだけでたいへんよろこんでくれました。佐野団長がいうように、どんな巨木もはじめをたどれば小さな一粒の種子で



“サージ”の小さな赤い実は小鳥を呼びよせる。

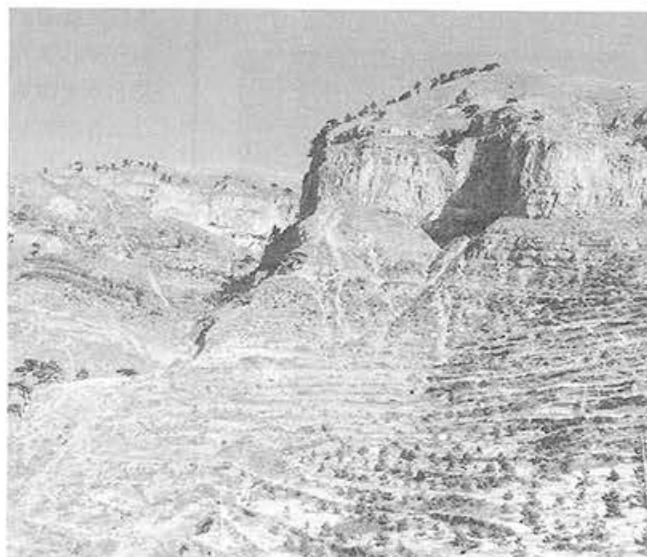
す。このような国際協力はいまの世界が必要としているものであり、国境の両側で人びとが望んでいることです。私たちの努力によって日本にしっかりした基盤を築けば、たとえば雁北地区で紹介された「桑干河青年緑化プロジェクト」に国際林をつくる魅力的な計画など、どんどん拡大していくことが可能になります。それはまた、アジアとの共生にむけて日本社会のあり方を変える第一歩ともなるでしょう。

どこへ行っても感動の連続！

岩山春夫（建設労働者）

私は大同をへて渾源にはいった最初の日、1月12日に、その感動をつぎのように記した。「凍りついた道路をまっすぐ恒山山脈に連なる山をめざして走りぬける。途中、ポプラが道の両側に植えられており、一面の平原にもよく植林が行われていて、人々の手入れのあとが見られた。山道に入った。

一見、ネパール、ヒマラヤに通じる道のように見える。佐野さんがなつかしそうにしている。ロバが荷を引き、右手を流れる川は凍りついており、切り立ち、地層をむきだしにした山がすぐ目の前にそそり立つ。ヤオトン（窓洞）もみえる。人が



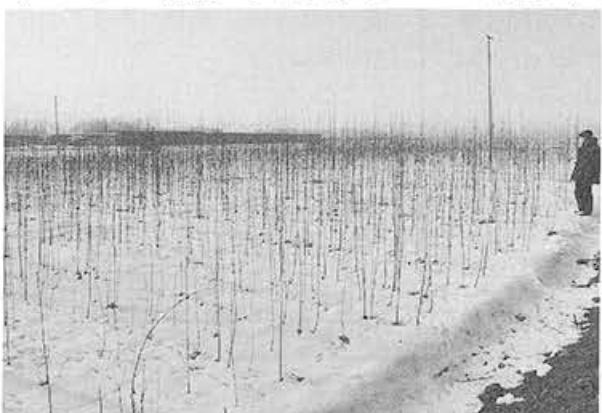
この北岳・恒山をふたたび緑で覆うことができたら……。

どこに行ってもあきることがない」。

その渾源県には、木にかける人々が大勢いた。その人達とのローソクの灯の下での緊張した会合は、生涯忘れないことはないだろう。渾源の人のことを「外側は冷たくても内部は暖かいマホ

ウビンのようだ」というと、北京で聞かされていた。本当にそうなんだ。ぜひ一度行ってほしい。そして、その眼で感じてほしい。

国境を越えた諸民族が協同して、緑の地球再生の事業に取り組むことが始まるなら、もしかしたら、人類の夢と未来を語りあえることができるかもしれない。



ボラの苗畑。成長の早いボラは平地の緑化の主役。住んでいて煙の上がっているものも多い。峠を越えた。一瞬パッと眼前が明るくなり眼下に一面の段々畑。ぐるりを山に囲まれた広大な渾源盆地だ。しばらく走って渾源県城に入った。通りの両側に露店が並び、宿舎の窓からそれが見える。外に出て歩いてみてたまらなくなり、東間さんとすこしの間だが歩いた。そば、菓子、衣類、おもちゃ、ブタ肉、魚、いろいろある。みな凍りついている。どこまで行ってもあきることがない。ほんとうに

渾源（フンユエン）プロフィール

渾源県は山西省の東北部にあり、東経113度23分、北緯39度24分。黄土高原の東端、太行山脈のふもとに位置する。面積は1950平方キロで、86%が山地と丘陵、平地は14%。標高は平均1050メートルで、最高は2333メートル。

年間平均気温は6.2度、大陸性気候で寒暖の差が激しい。冬は厳寒で雪が少なく、春は乾燥し風が強い、夏に雨が集中し自然災害が多く、秋は短い。年間降雨量は430ミリ、蒸発量は1300ミリ。

人口は31万5000人、7万2000世帯で、うち農業人口が26万8000人。

主な農作物は、アワ、トウモロコシ、コムギ、ジャガイモ、マメ、アブラナなどで食糧生産高は10万トン。百種近くの漢方薬を産し、オウギは特産。一人あたり年収は400元（約1万円）。

地下資源が豊富で石炭、沸石、花崗岩、石英など20種の鉱石を産出し、とくに石炭は豊富。

県城から5キロのところに中国五岳のひとつ北岳・恒山があり、ふもとに懸空寺がある。雲岡の石窟で有名な大同から渾源、五台山とむすぶラインは観光コースとしても名が通っている。

「どんなに小さくても始めることだよ。サハラ沙漠だって1000年かければ緑になるんだよ」。帰ってきてから聞いた85歳の遠山正瑛先生のこの声に大いに感動された。そして、その第一歩を踏みだす活動が開始された。

無農薬「はつさく」をどうぞ！

柑橘類の無農薬・低農薬栽培に取り組んでいる高知県甲の浦の田中隆一さんから、3月10日から完全無農薬の「はつさく」を出荷するとの知らせがありました。いつもおいしくてファンが多いのですが、今年は裏年で数に限りがあるので、

ご注文はお早めに。
収益の一部をこの運動に寄付していただきますので「緑の地球ネットワークの紹介」だとひと言つけ加えてください。

価格 10kg入り・2500円

送料 関西 620円・関東 820円

TEL. 08872-9-2260

FAX. 08872-9-2500

サルは森林で生まれ、進化し、生きてきた。しかし、いま……

「奇形ザル」の視点から

武田繁典（高校教員）

野生のサルを餌付けした野猿公苑で手足に障害を持ったサルが多数発生した、いわゆる『奇形ザル』問題のことを知っている人は多いと思う。最初の発見は1955年の高崎山で、その後全国的に見つかっている。特に淡路島モンキーセンターでは、その発生率が開設以来25年間の平均で約21%と高く、所長の中橋実さんは心をいためてきた。

高校の生物教師である私は14年前にここを訪れて中橋さんを知り今日まで通い続けている。『奇形ザル』問題の重要性と、それに真正面から取り組み続けてきた中橋さんに、多くのことを教えられ、考えさせられてきた。

自然保護の立場から見れば、野生ザルの餌付けはおかしい、自然に返せというかもしれない。しかし、世界中で約200種のサルのなかでも『北限のサル』として貴重なニホンザルは、国土開発と林業政策のあおりで棲息場所を狭められ、「害獣」として殺され、絶滅も懸念されるほどになっている。

人類誕生のはるかむかし、森林に入り込んで進化し、長年の樹上生活で人類誕生の基礎を築いたサルたち。日本列島に我々が住みつくはるかむかしにやってきて、豊かな森林で暮らしていたニホンザルたち。『万物の靈長』といわれた私達人間は、このサルたちと

コータくん、 9年半の愛をありがとう

ニホンザルの奇形問題にまつぶ



淡路島モンキーセンター

中橋さんの最近のパンフ(600円・〒240)

共生できないのだろうか。

『奇形ザル』の原因は、中橋さんや彼に協力する研究者たちの努力で、輸入穀物（人間用）の残留農薬であることがほぼ確定した。サルたちの棲息環境を侵し、食べ物を汚した報いは、間違いなく私たち人間にもはね返ってくるだろう。今からでもおそくはない。サルも住める豊かな森林を回復し、自然の中で、共生できるみちをめざそうではないか。

【淡路島モンキーセンター】

兵庫県洲本市畠田289 ☎0799-29-0112

数千年の文明によつて破壊された環境を、世界でもまれな規模で

緑化しつつある中国山西省は、まぎれもなく地球環境回復の最前線のひとつ。この挑戦を国境を越えて応援するために、みんなの資金協力をお願いします。

現地では、1ムー(6.7アール=200坪)の植林が100元（日本円2500円）でおこなわれており、私たちの小さな協力でも、大きな力を發揮することができます。しかもその効果は、子の代、孫の代と時がたつにつれて大きくなるのです。



中国緑化資金にご協力を！

第1次考察団が約束してきたのは、初年度250万円ですが、「桑

干河青年緑化プロジェクト」はじめすぐりでも協力にとりかかりたいプロジェクトがたくさんあります。

ご協力いただいた基金は、「緑の地球ネットワーク（準）」が責任をもって現地に届け、現地との協議をつうじてもっとも有効なかたちで活かされるとともに、歴史に残る国際協力として記念されます。

会費とは別扱いにしますので、ご送金のさいにその旨を明記してください。